

革 嶋 館 跡

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

跡 館 鳴 革

2009 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、宅地造成に伴う革嶋館跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

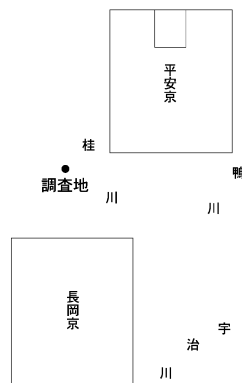
平成 21 年 10 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 革鳴館跡
- 2 調査所在地 京都市西京区川島玉頭町地先
- 3 委 託 者 積和不動産関西株式会社 代表取締役 松吉三郎
- 4 調査期間 2009年8月31日～2009年9月29日
- 5 調査面積 365 m²
- 6 調査担当者 加納敬二・布川豊治
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「山田」「桂」「中山」「川島」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。ただし、柵・柱列は別に番号を付した。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 加納敬二・布川豊治・竜子正彦
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	6
(1) 基本層位	6
(2) 遺構の概要	6
(3) 第2面 古墳時代初頭の遺構	9
(4) 第1面 室町時代から江戸時代の遺構	10
4. 遺 物	13
(1) 土器類	13
(2) その他の遺物	16
(3) 自然遺物	16
5. ま と め	19

図 版 目 次

図版1	遺構	1 古墳時代（第2面）溝42全景（西から）
		2 竪穴住居41（東から）
		3 溝59（北東から）
図版2	遺構	1 室町時代から江戸時代（第1面）全景（北東から）
		2 堀1（北から）
		3 堀2（東から）
図版3	遺構	1 井戸3（北東から）
		2 集石遺構35（北から）
図版4	遺物	出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：2,500）	1
図2	調査前全景	2
図3	調査風景	2
図4	調査区配置図（1：1,000）	2
図5	周辺遺跡位置図（10,000）	4
図6	古墳時代（第2面）遺構実測図（1：200）	7
図7	室町時代（第1面）遺構実測図（1：200）	8
図8	柱列3実測図（1：100）	9
図9	溝42断面図（1：50）	9
図10	堀1・2断面図（1：100）	11
図11	井戸3実測図（1：40）	12
図12	集石遺構35実測図（1：40）	12
図13	柵2実測図（1：100）	12
図14	竪穴住居41・土坑79・溝42出土遺物実測図（1：4）	14
図15	堀1出土遺物実測図（1：4）	15
図16	堀2出土遺物実測図（1：4）	15
図17	土坑13出土壁土	16
図18	堀1・2出土自然遺物	17
図19	古墳時代の遺構概略図（1：1,000）	19
図20	室町時代の遺構概略図（1：1,000）	19
図21	革嶋館跡周辺地籍図	20
図22	「譲渡革嶋家屋敷図」『革嶋家文書』	21
図23	「革嶋家屋敷絵図」『革嶋家文書』	21

表 目 次

表1	遺構概要表	6
表2	遺物概要表	13
表3	堀1・2出土自然遺物一覧表	18

革 嶋 館 跡

1. 調査経過

調査地は、京都市西京区川島玉頭町地内に所在する竹藪地である。当地に宅地造成の計画がなされた。当地は山城国葛野郡革嶋荘を本拠とする領主革嶋氏の館跡の一画にあたることから、埋蔵文化財調査が必要となった。

まず、遺構の残存状況を把握するため、京都市文化市民局芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）により試掘調査が実施された。調査の結果、中世の堀・土坑などの遺構が確認され、発掘調査の指導が行われ、調査を実施することとなった。

調査は、2009年8月31日から重機掘削を開始した。調査区は新設道路を対象にL字状に設定した。調査面積は365㎡である。調査では中世から近世の革嶋館の状況を確認し、さらに詳細分布調査で確認した古墳時代の竪穴住居などの遺構の広がりをも明らかにすることも目的に実施した。

調査期間中においては文化財保護課から8月31日、9月3日、9月16日、9月24日の4回、現場指導を受けた。検出した遺構には古墳時代初頭から江戸時代のものがある。遺構は竪穴住居、堀、溝、井戸、土坑などで、これらを地山とみられる同一面で調査・記録した。革嶋氏が鎌倉時代から代々残してきた『革嶋家文書』（京都府立総合資料館所蔵）の江戸時代中期の絵図には、革

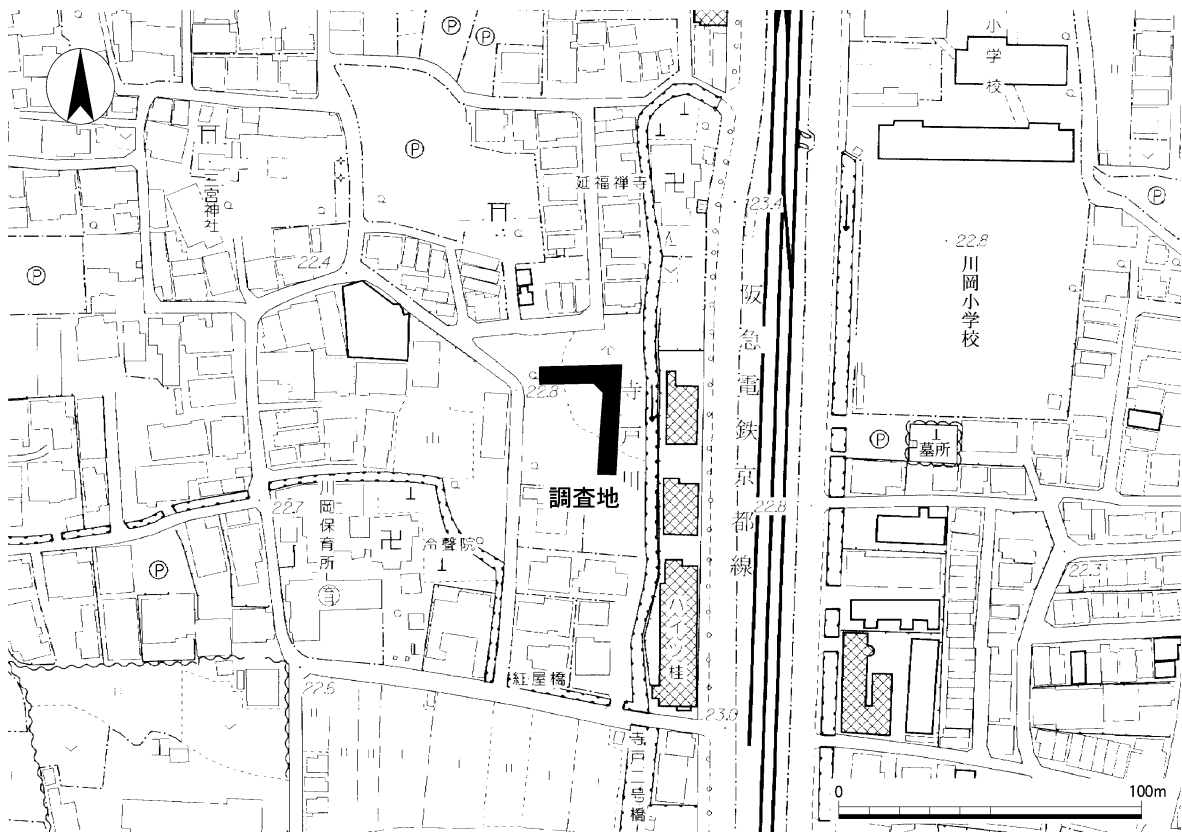


図1 調査位置図 (1 : 2,500)



図2 調査前全景



図3 調査風景

嶋春日神社を含む南の位置に、土塁と堀に囲まれた館跡を示した場所が描かれている。今回の調査地は、その絵図に示された館跡の南東部にあたる。西側については、2008年の試掘調査で南北方向の堀の存在を明らかにしている。今回の調査では、絵図と試掘調査の成果を踏まえ、中世から近世の堀と土塁の状況を確認し、館跡の一端を明らかにすることができた。また、古墳時代の竪穴住居や溝を検出し、当地における開発の時期を提示することができた。以上の成果を挙げ、調査は9月29日に終了した。

なお、調査期間中の9月26日には現地公開（参加者約550名）を行い、調査成果の公表、資料の活用に努めた。

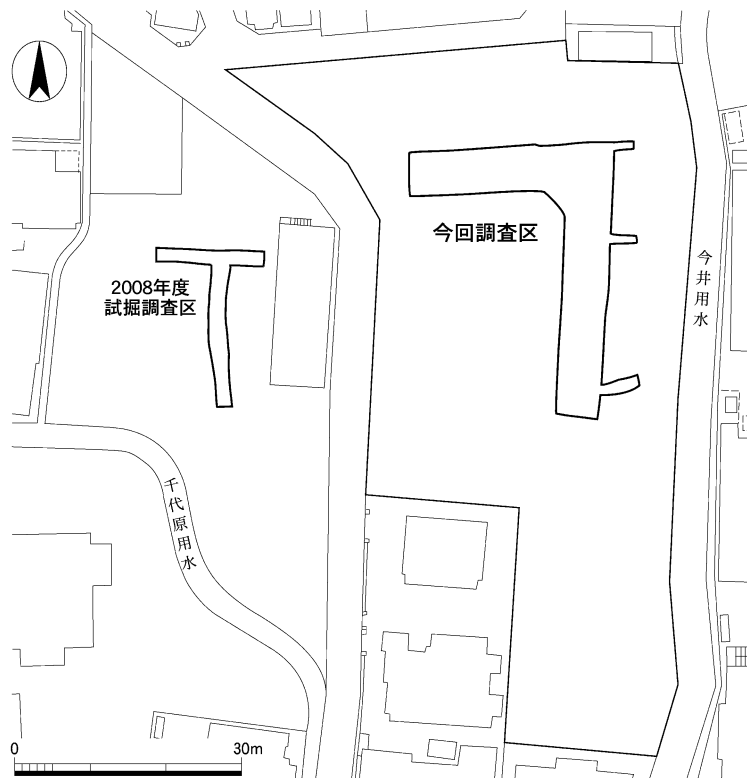


図4 調査区配置図（1：1,000）

2. 位置と環境

調査地は、京都の南西の郊外である京都市西京区川島玉頭町に位置し、西京区の南東部にあたる。調査地を含む一帯は、桂川右岸のやや高燥な平坦地で、標高は23m前後で、北西から南東方向にわずかに傾斜する。

弥生時代から古墳時代 調査地の南東約500mには、弥生時代から古墳時代の遺物散布地である下津林遺跡がある。1979年の京都府立桂高校内での調査(図5-1)では、弥生時代の竪穴住居や溝などが発見されている¹⁾。1990年の陸上自衛隊関西地区補給処桂支処内での詳細分布調査(図5-2)では、弥生時代中期の土坑を検出している²⁾。その南東約2kmには、弥生時代中期から古墳時代にかけての集落跡である上久世遺跡がある。これまでに6回の発掘調査が実施されており、方形周溝墓、竪穴住居や流路跡など多数の遺構を検出している。近年では1993年の発掘調査³⁾で、弥生時代中期から古墳時代の竪穴住居、土坑などを検出し、さらに集落の居住区域を明らかにしている。また南に隣接して、縄文時代晩期から室町時代までの遺跡が重複している中久世遺跡がみられる。いずれも桂川右岸の氾濫平野を流れる小河川の自然堤防上の微高地に営まれた集落で、桂川や小河川に沿って南から北へ開発が進んだと考えられる。

古墳は、4世紀中葉と推定される檜原地区の一本松塚古墳、百々池古墳、御陵地区には5世紀中頃の天皇の杜古墳などの大規模なものが点在しており、下津林遺跡、上久世遺跡などの桂川右岸域の集落との関連が推測される。5世紀中頃と推定される天皇の杜古墳は、市内最大規模の前方後円墳として現存する。1989年に発掘調査⁴⁾が行われ、翌年の1990年から1993年にかけて史跡公園として保存整備事業が実施されている。6世紀末から7世紀にあたる古墳時代後期の南荒木古墳や塚ノ本古墳、権現原古墳などが西側の段丘上に、また平坦地の川島地区には三重古墳がみられたが、いずれも全壊している。集落跡としては、古墳時代中期から後期とみられる檜原遺跡が広域の立会調査⁶⁾で確認されており、後期古墳との関連で注目されている。

飛鳥・白鳳時代から奈良時代 白鳳時代の創建になる檜原廃寺が長岡丘陵の北東端の台地上に位置している。1967年の1次調査⁷⁾で八角形の瓦積基壇をもつ塔跡を中心に中門、回廊、築地などを発見し、1971年に国の史跡指定がなされ、現在は史跡公園として整備されている。その後、立会調査や試掘調査が行われ、1997年には3・4次調査⁸⁾が実施され、当寺が平安時代中期に廃絶したことが判明している。1987年の広域立会調査⁹⁾では史跡公園の南方丘陵斜面で檜原廃寺に供給していた瓦窯跡を発見している。延暦3年(784)に乙訓域に長岡京が遷都され、調査地周辺は京の北近郊地となる。

平安時代 延暦13年(794)、都は長岡京から葛野郡北域の平安京に遷され、調査地周辺は葛野郡の南西部および乙訓郡の北部となり、京の南西の近郊地となった。平安時代中期には上・下桂庄や革嶋庄などの荘園をはじめ、貴族による大土地所有が進行した。荘園体制は桂川用水建設による水利灌漑にも支えられて、紆余曲折を経ながらも室町時代後期まで存続する。檜原遺跡では1987年の広域立会調査¹⁰⁾で、弥生時代から江戸時代の遺物包含層を広範囲にわたり確認し、また平安時代前期の建物や井戸なども検出している。平安時代後期には革嶋荘に南荘(近衛家領)

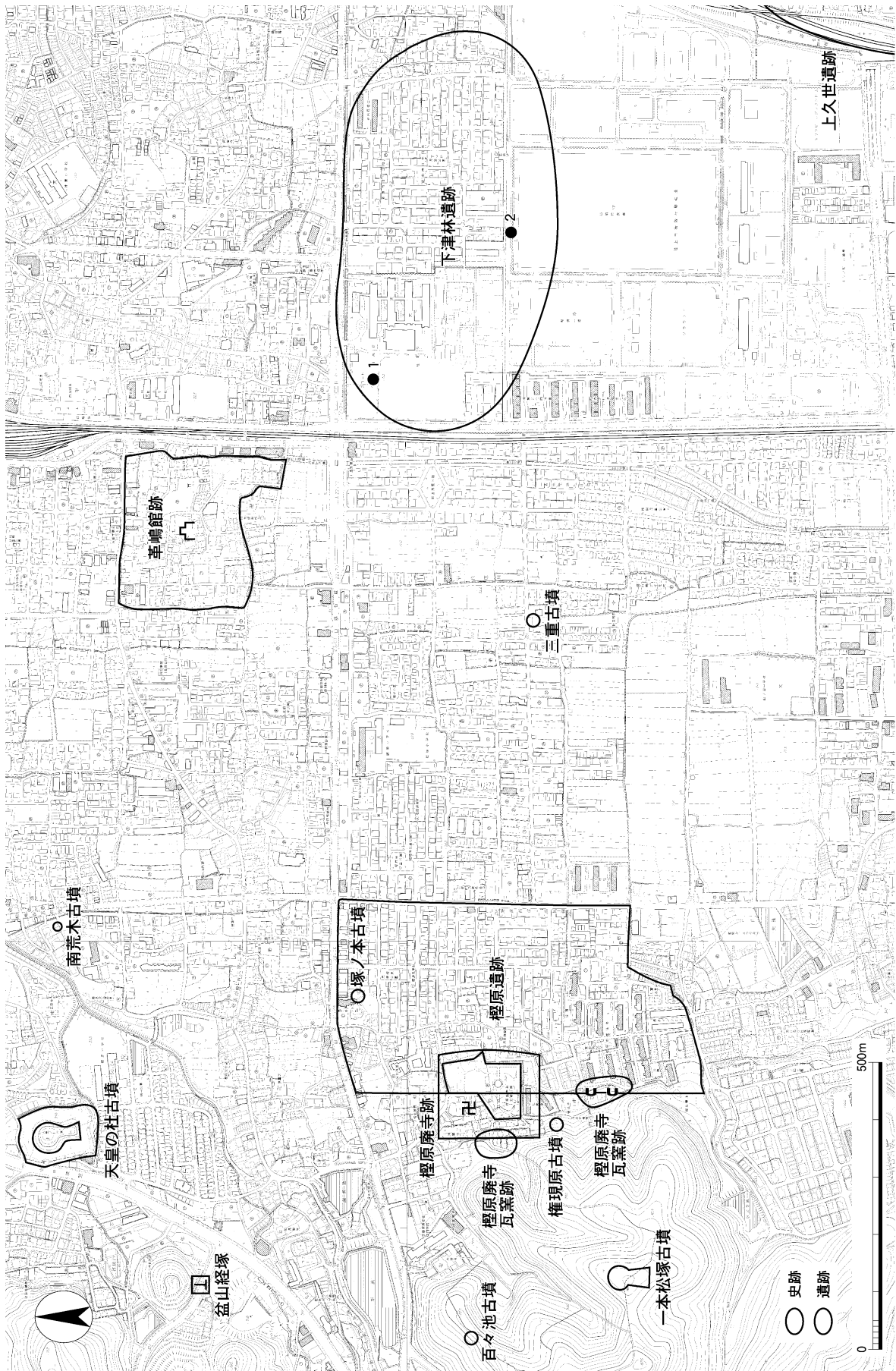


図5 周辺遺跡位置図 (1 : 10,000)

と北荘（山科家領）が今井用水を境に東西に立地していたと想定されている。西側が南荘で、革嶋館の前身とされる政所屋敷がここに推定されている。その他、榎原遺跡の北西の丘陵東斜面には、1951年に多量の瓦経片が発見された平安時代後期とみられる盆山経塚が位置する。

中世 鎌倉時代になり六波羅探題の管轄の下、武家支配が始まる。葛野・乙訓両郡に郡奉行が置かれ、革嶋氏ら国人・土豪の自立化の動きもあり荘園体制は動揺する。当地の国人は「西岡御家人」とよばれて幕府の軍事的基盤となったが、多くは15世紀に相次いで守護となった畠山・細川両氏の被官となった。戦国時代には細川氏の被官となり、細川氏の有力家臣団を構成した。一方、交通上の要地のため、応仁の乱を始めとする戦国の争乱で戦場となり、久遠寺などの社寺は廃絶し荒廃した。

革嶋氏は清和源氏の流れを汲む佐竹氏の傍流で、14世紀から革嶋荘の南庄に位置する革嶋館に在住した土豪である。『革嶋家文書』では15世紀後半に土地の売券が集中し、革嶋氏が南荘で急速に土地を集積していたとされる。

近世 豊臣秀吉による天正十七年（1589）の検地をはじめ、荘園の整理と領主の組み替えが行われ、竹林にも検地が施行され、近世的知行制が成立している。革嶋館は元禄十五年（1702）の絵図（『革嶋家文書』）に詳細に描かれており、この時期まで存続していたことが確認できる。

註

- 1) 「下津林遺跡」『埋蔵文化財発掘調査概報 1980-1』京都府教育委員会 1980年
- 2) 「下津林遺跡（90MK8）」『京都市内遺跡立会調査概報 平成3年度』京都市文化観光局 1992年
- 3) 『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 4) 「史跡 天皇の杜古墳」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994年
- 5) 『史跡 天皇の杜古墳保存整備事業報告書』京都市文化観光局 1994年
- 6) 『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
- 7) 『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1998年
杉山信三・佐藤興治「榎原廃寺跡の発掘調査」『仏教芸術』毎日新聞社 1968年
- 8) 『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 9) 註6に同じ
- 10) 註6に同じ

3. 遺 構

(1) 基本層位

調査区の基本層位は、まず地表下 0.7 ～ 0.8m までが現代の盛土（竹藪の客土）で、直下には第 1 層にぶい黄褐色砂泥（中世）が堆積し、下の第 2 層である褐色砂泥の地山となる。遺構面は 2 面確認した。第 1 面は第 1 層の上面としたが、堀 2 より東半部は、竹藪の土入れ、土採りなどの削平により地山上面となる。第 2 面については、第 2 層の地山上面とした。

ここでは第 1 面と第 2 面で検出した主要な遺構について概述する。遺構の時期は、第 1 面が室町時代後期を主体とする江戸時代まで、第 2 面は古墳時代初頭が主体である。

(2) 遺構の概要

調査では古墳時代初頭から江戸時代までの遺構を総数 69 基検出した。遺構には柱穴、集石遺構、土坑、溝、堀、竪穴状居、井戸などがある。

古墳時代初頭の遺構は総数 30 基ある。遺構には竪穴住居、溝、土坑、柱列がある。調査区の北壁際で検出した東西方向の溝は調査区外の北東と南西に延びるため、全様は不明であるが、規模や形状から、何らかの区画を示す溝と考えられる。南接して検出した柱列は、調査区外の東西と南に延びる柵か塀の遺構とみられる。調査区南端の南壁際では、調査区外の南に広がる竪穴住居の北端を検出している。他に調査区東半部でピット群を検出しているが、まとめることができなかった。

室町時代から江戸時代の遺構は総数 39 基ある。遺構には柱穴、集石遺構、土坑、溝、堀、井戸などがある。調査区北側では室町時代の南北方向の堀を検出した。調査区外の北と南に延びるため、全様は不明であるが、西側では室町時代の石組井戸や集石遺構を検出しており、当該期の館に関連する防御施設とみられる。この堀の東で、ほぼ同一規模の堀を南北約 33m にわたり検出し、南端では屈曲し調査区外の西に延びることから、館を取り囲む堀の南東角とみられる。堀の埋土や堆積状況から江戸時代まで維持され、縮小しながらも水路として機能していたことが窺える。

以下に第 2 面と第 1 面の主要な遺構について概述する。なお、遺構および遺物の時期は平安京・¹⁾京都 I 期～ 期編年案に準拠する。

表 1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	竪穴住居41、柱列 3、溝42・59・67、土坑79	
室町時代～江戸時代	堀 1・2、集石遺構35、井戸 3、土坑13、柵 1・2	

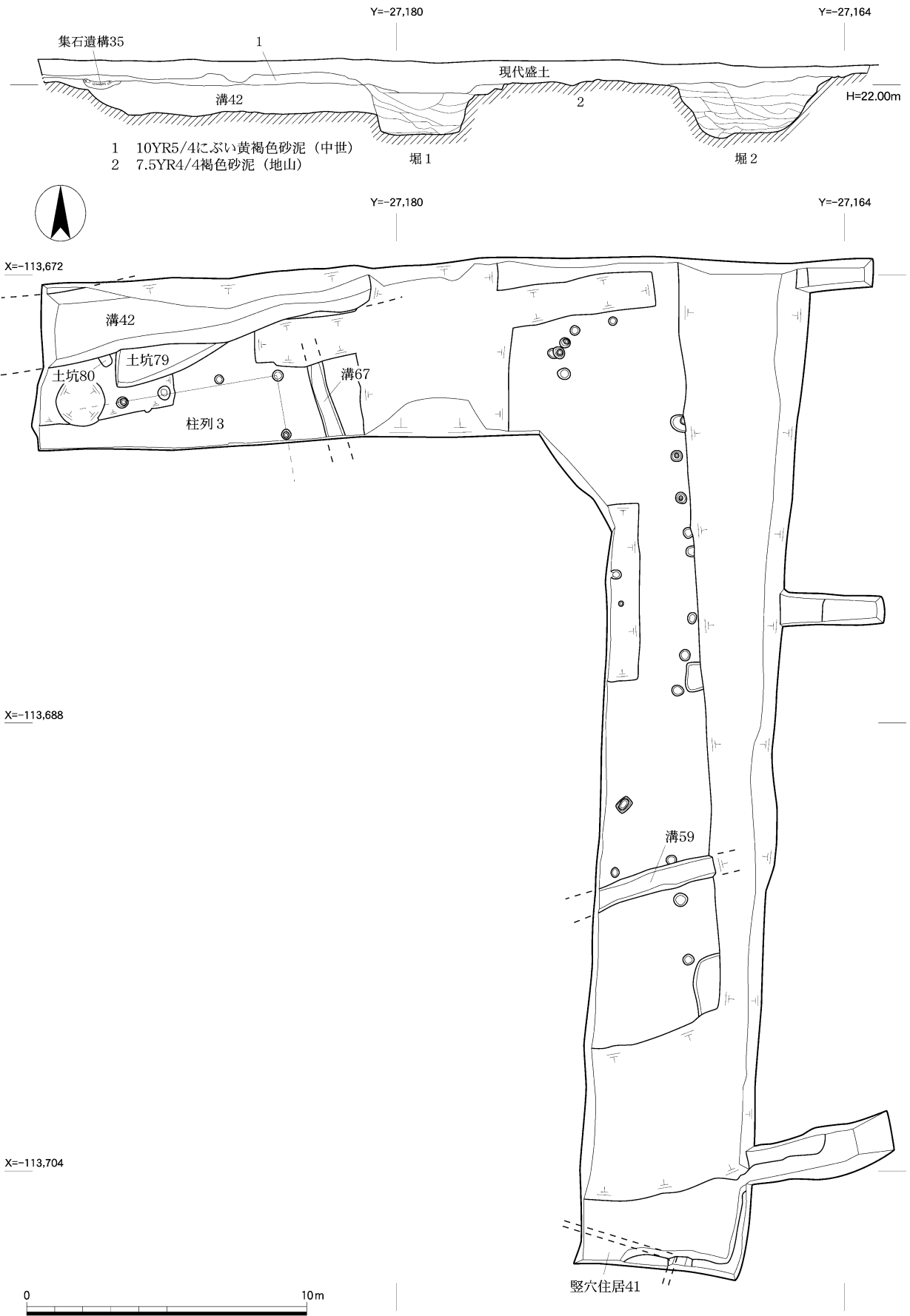


図6 古墳時代 (第2面) 遺構実測図 (1:200)

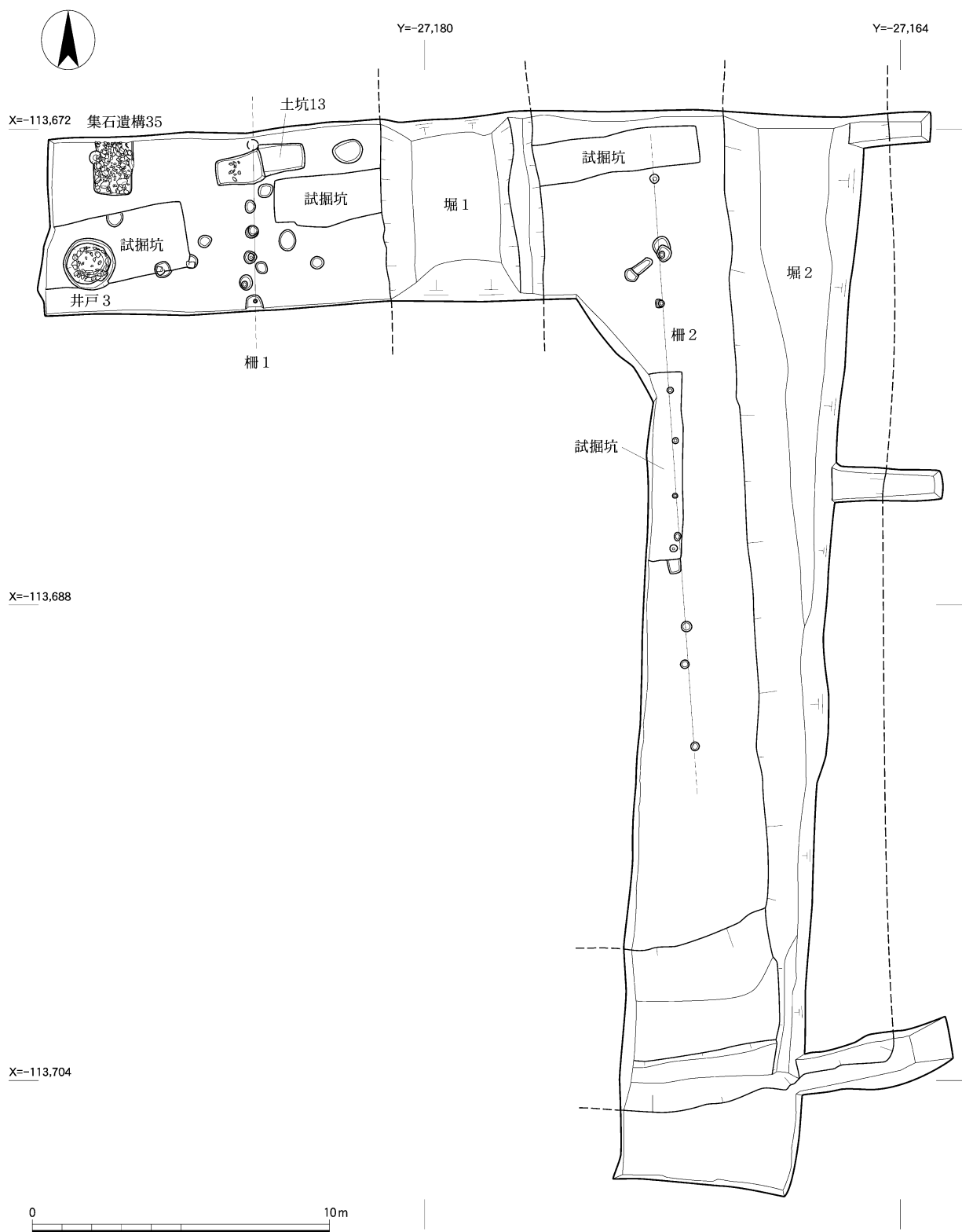


図7 室町時代（第1面）遺構実測図（1：200）

(3) 第2面 古墳時代初頭の遺構 (図6、図版1)

柱列3 (図8) 調査区西側の北半部で検出した柱列で、東西方向で、東端では南に曲がり、調査区外の西と南へさらに延びる。溝42から南1.5m、溝67から西1.5mに位置する。柱間は西端が1.5mで、他は2m等間隔である。東西3間6m・南北1間2m分を検出した。塀あるいは柵の可能性はある。

土坑79 調査区西側の北半部で検出した土坑である。土坑の北側は溝42と重複しているため、平面形状は不明である。残存規模は南北約1m、東西約4m、深さ0.3mである。埋土から古墳時代の土師器が出土している。

溝42 (図9、図版1) 調査区西側の北壁際で検出した。東西方向の溝で、調査区外の北東と西に延びる。規模は幅2.7m、深さ1.0mである。断面形状は逆台形である。埋土からの出土遺物は古墳時代初頭の土器類が主体で、紡錘車も出土している。

溝67 調査区西側の北半部で検出した南北方向の溝で、調査区外の南に延び、北側は溝42に

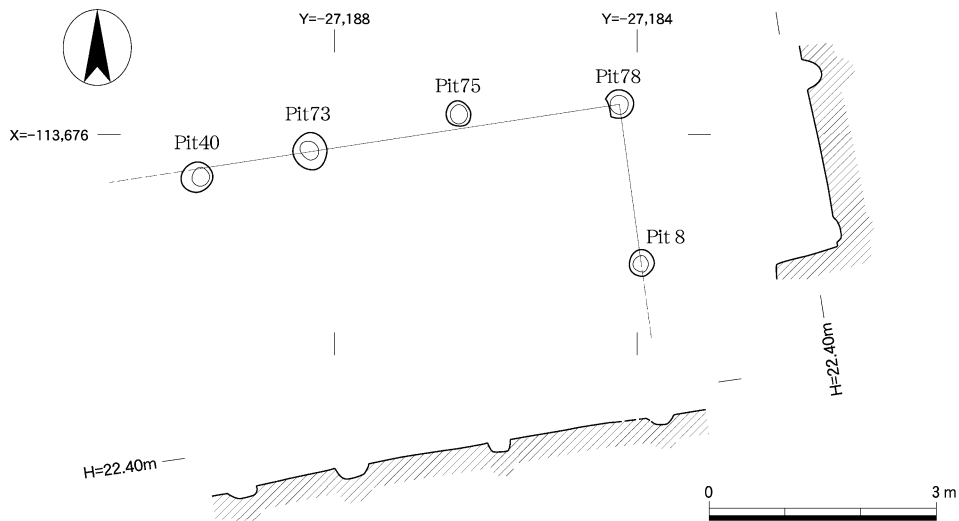


図8 柱列3実測図 (1:100)

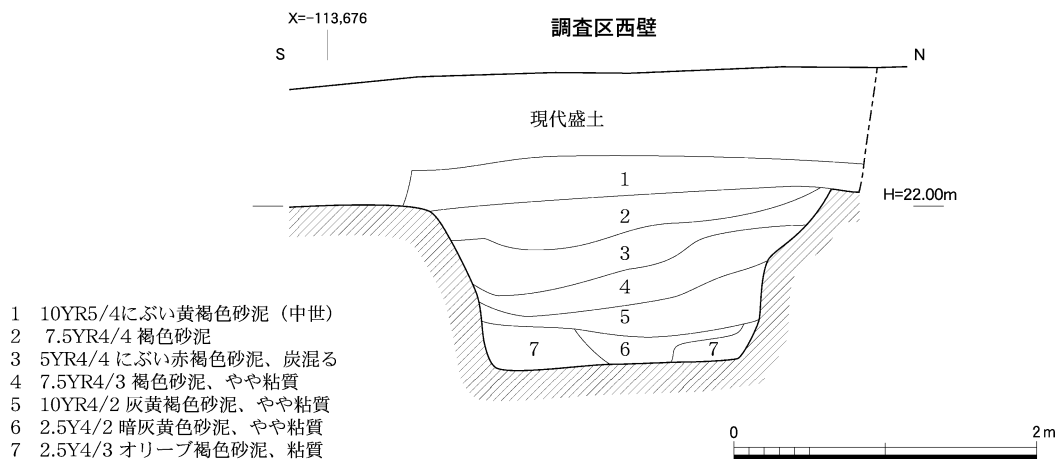


図9 溝42断面図 (1:50)

取り付くと考えられる。規模は幅 0.5m、深さ 0.1m である。

溝 59 (図版 1) 調査区の南半部で検出した北東から南西方向の溝で、調査区外の南西に延びる。東は堀 2 と重複しており不明である。規模は幅 0.8m、深さ 0.2m である。

竪穴住居 41 (図版 1) 調査区南壁際で検出した竪穴住居の北端で、調査区外の南に広がる。規模は一辺 3 m 以上、壁溝は幅 0.3m、深さ 0.1m が残存する。住居内からは古墳時代初頭の土器類が出土している。

(4) 第 1 面 室町時代から江戸時代の遺構 (図 7、図版 2)

堀 1 (図 10、図版 2) 調査区の北部で南北 6 m 分検出し、調査区外の北・南に延びる。規模は幅 4.7 ~ 5.0 m、深さ 1.9 m である。断面形状は逆台形である。堀内の埋土堆積状況から空堀であったとみられる。断面にみられる 1・2 層から江戸時代の遺物が出土しており、その頃には浅い溝として機能していたとみられる。

堀 2 (図 10、図版 2) 調査区の東部で西肩を南北約 33 m にわたり検出した。北側は調査区外の北に延びる。南側では屈曲し調査区外の西に延びる。東西方向では両肩を 5 m 分検出した。規模は幅 5.3 ~ 5.5m、深さ 1.6 ~ 1.8m である。断面形状は逆台形で、底部は平坦である。さらに調査区外の西に延びる。南北方向の堀東の肩部を確認するために、調査区東端に幅 1 m、東外に長さ 3 ~ 5 m の規模で、3 箇所 of 拡張部を設定した。その結果、堀幅 4.8 ~ 5.0 m、深さ 1.9 ~ 2.0 m であることが判明した。堀の下層には泥土層が厚く堆積しており、水堀であったとみられる。また、江戸時代まで縮小しながらも、機能していたことも明らかになった。

井戸 3 (図 11、図版 3) 調査区の北部の西端で検出した。堀 1 西肩から西 9 m に位置する。円形の石組井戸で、内径 1.7 m、深さ 1.5 m 以上である。石組の石材が内に崩落していたが、南側は良好に残存していた。

集石遺構 35 (図 12、図版 3) 調査区西部の北壁際で検出した。平面形状は長方形で、調査区外の北に延びていた。堀 1 西肩から西 8 m に位置する。規模は幅 1.1 m、長さ 1.6 m 以上、深さは 0.2 m である。遺構内は上・下 2 層に分かれ、上層には大・小の石が詰められていたが、中には焼締陶器の小破片や瓦片もみられた。下層は炭や焼土を含み、底面には炭層もみられた。

柵 1 調査区北半部の西側で検出した南北方向の柵である。堀 1 の西肩から約 5 m に位置し、南北方向で 6 m 分の柱穴 5 基検出した。柱間は 1 ~ 1.2m と不揃いである。

柵 2 (図 13) 調査区東半部で検出した南北方向の柵である。堀 2 西肩から 2 m、堀 1 東肩からは 4 m に位置する。南北 19m 分の柱穴 10 基を検出した。柱間は不規則であるが、1.2 ~ 1.6m の狭い間と 2.5 ~ 3.0m の広い間が交互に配置され、柱穴 2 基が対になっている。

註

- 1) 小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房 2005 年



図10 堀1・2断面図 (1:100)

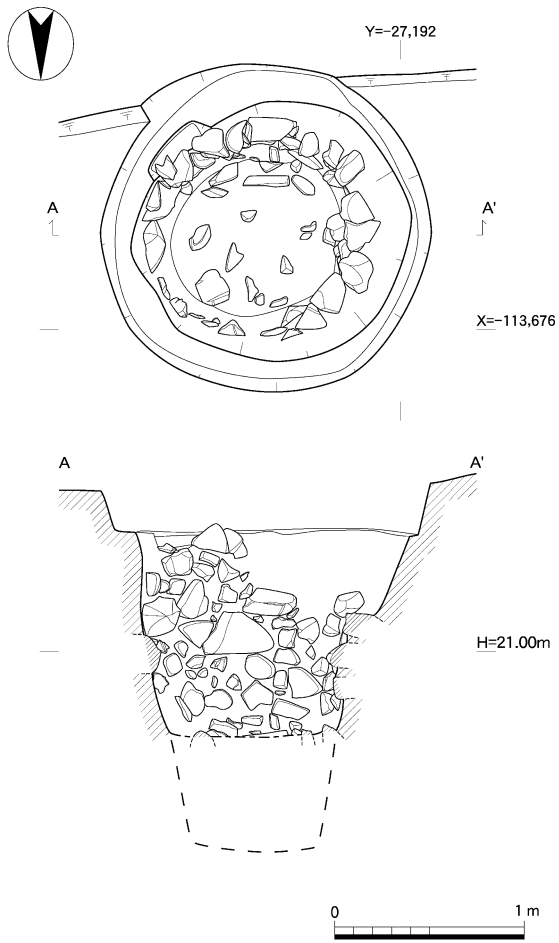
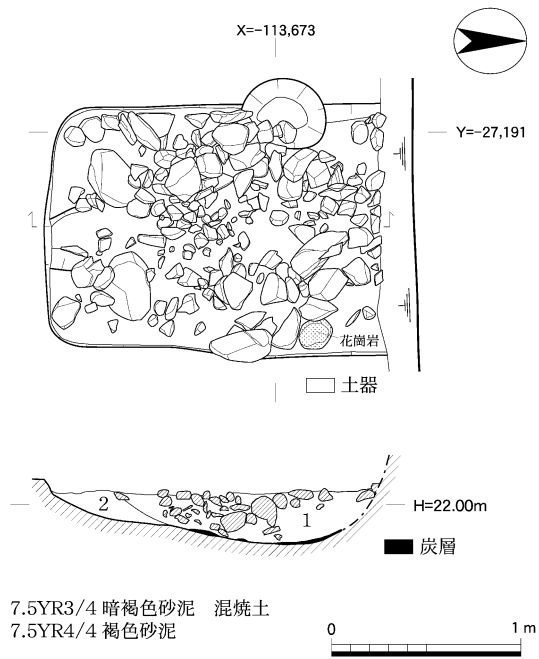


図11 井戸3実測図 (1:40)



- 1 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 混焼土
- 2 7.5YR4/4 褐色砂泥

図12 集石遺構35実測図 (1:40)

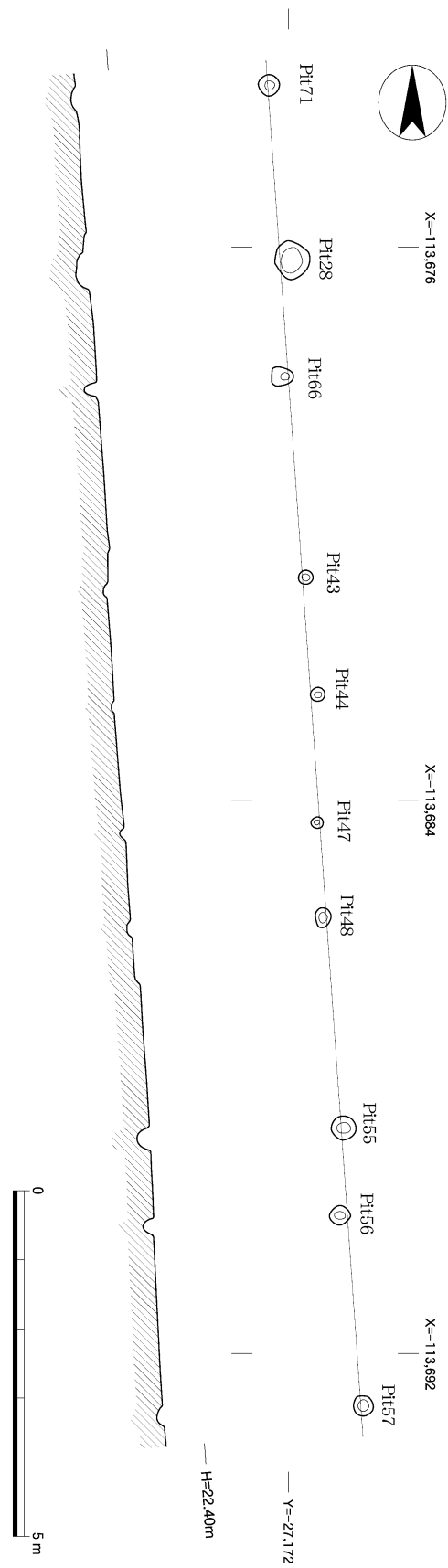


図13 柵2実測図 (1:100)

4. 遺物

出土遺物は、整理箱で18箱である。遺物は古墳時代初頭から江戸時代までのものがある。時代別にみると、室町時代後期と江戸時代のもが多く出土している。遺物には土器類、瓦類、金属製品、土製品、石製品がある。土器類が最も多い。

(1) 土器類

土器類には土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、輸入陶磁器などがある。以下では、各時期の主要な遺構の出土土器について概述する。

1) 古墳時代前期

竪穴住居41、土坑79、溝42などから出土した。また、室町時代や江戸時代の遺構や遺物包含層に混入して出土したものも多い。ただし、完形に復元できる個体は少なく、表面が摩耗・損傷しているため調整の詳細が不明瞭な破片が多い。

竪穴住居41(図14、図版4) 土師器(1~4)は住居廃絶後に一括投棄されたと考えられる一群である。1・2は壺の口縁部である。1は口径15cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。内外面ともに磨滅が著しい。2は口径13.5cm、口縁部が斜め上方に立ち上がり、端部は丸くおさめるタイプである。3は底部である。4は甕で、口径4cm以上、口縁が「く」の字状に外反するタイプである。庄内式併行期から布留式(古)に属する。

土坑80(図14、図版4) 土師器甕(5・6)が出土した。5は口径10.5cm、6は口径16cmである。ともに「く」字状に外反するタイプである。

溝42(図14、図版4) 土師器(7~10)、紡錘車(11)は溝内に投棄された一群である。7は壺の口縁部である。口径11.2cmである。外反気味に直立し、端部は丸くおさめる。内外面とも

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器、須恵器、石製品	6箱	土師器10点、石製品1点	5箱	0箱
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土製品	8箱	土師器2点、瓦器2点、施釉陶器1点、焼締陶器6点、輸入陶磁器2点、土製品1点、壁土5点	7箱	0箱
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、軒丸瓦、軒平瓦、横棧瓦、丸瓦、平瓦	6箱	土師器5点、施釉陶器2点、染付3点、青磁1点	4箱	2箱
合計		20箱	41点(2箱)	16箱	2箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

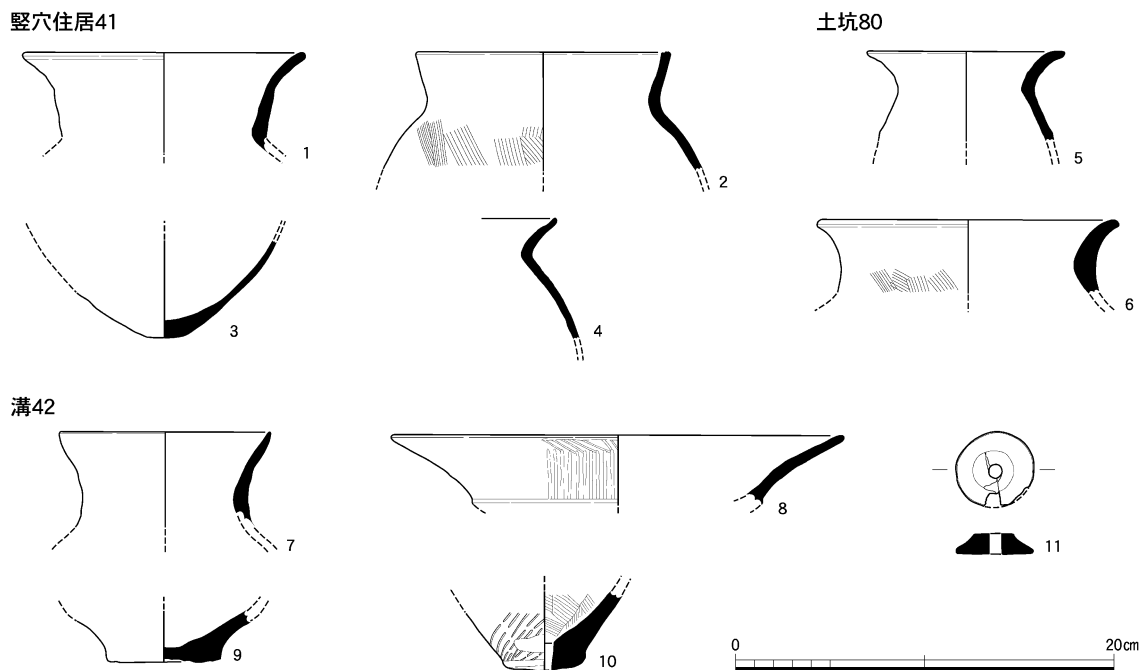


図 14 竪穴住居 41・土坑 79・溝 42 出土遺物実測図 (1 : 4)

に磨滅が著しい。8は高杯の杯部である。口径 24 cmである。斜め上方に外反し、端部は丸くおさめる。調整は外面は縦方向のミガキを施しているが、内面は磨滅しているため不明である。9は甕の底部で、平底を呈している。10は平底状の有孔鉢である。調整は底部外面はタタキで、内面はハケである。孔径は 0.4 cmである。庄内式併行期に属する。

2) 室町時代から江戸時代

堀 1・2 などから出土した。室町時代の遺物には土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器などがある。その他には瓦類、銭貨などがある。

江戸時代の遺物には土師器、施釉陶器、染付磁器などがある。その他には瓦類がある。以下に堀 1・2からの出土遺物について概述する。

堀 1 (図 15、図版 4) 土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などが出土した。12は白色系の土師器皿である。口径 11.0 cm、器高 1.6 cmである。磨滅著しく、調整は不明である。形態の特徴から京都 X 期中に属する。13・14は美濃系の施釉陶器灰釉椀である。13は椀の口縁部の小破片である。内外面ともに灰白色の施釉がみられる。14も口縁部の小破片である。内外面ともに施釉がなされ、外面には輸入陶磁器の写しとみられる雷文が描かれている。15は輸入陶磁器の青磁椀の口縁部小破片である。内外面ともに施釉がなされ、外面には雷文が描かれている。16・18は瓦器である。16は羽釜の口縁部破片である。調整は外面はナデ、内面はオサエである。18は大鉢の底部破片である。外面には脚が付くタイプである。調整は外面下半はミガキ、内面はナデである。17は備前産の焼締陶器播鉢の口縁部小破片である。調整は内外面ともにナデである。19は丹波産の焼締陶器盤の口縁部破片である。口径 35 cm、器高 4.7 cmである。調整は内外面ナ

デで、底部外面はオサエである。

堀 2 (図 16、図版 4) 土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器などが出土した。20～25 は土師器皿である。20～24 は口径 7.5～7.8 cm、器高 1.3～1.4 cm の小型皿である。調整は外面がオサエ、内面はナデである。京都 期に属する。25 は口径 8.5 cm、器高 1.8 cm である。調整は外面オサエで、端部はヨコナデ、内面はナデである。京都 X 期中に属する。26～28

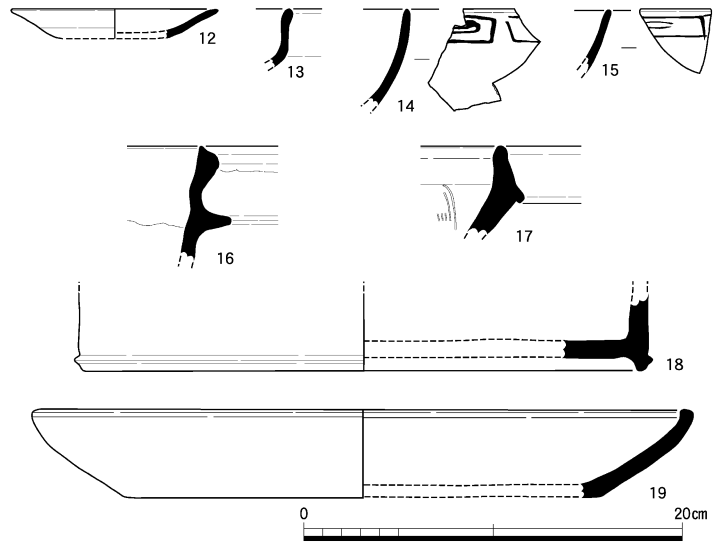


図 15 堀 1 出土遺物実測図 (1 : 4)

は伊万里産の染付磁器である。26・27 は椀で、高台底部の外面以外は施釉されている。26 は口径 7.1 cm、器高 3.3 cm と小型である。27 は口径 11.8 cm、器高 6.1 cm である。28 は仏飯器で、底部外面以外は全面に施釉されている。口径 6.8 cm、器高 6.3 cm である。29 は青磁香炉である。底部内外面以外は全面施釉されている。口縁部が欠損しており口径は不明、器高 6.0 cm 以上である。30 は輸入陶磁器の青磁椀の口縁部小片である。内外面ともに施釉がなされ、口縁部外面に文様がみられる。31・32 は備前産の焼締陶器である。31 は播鉢の口縁部小破片である。32 は徳利で、口径 5.5 cm、器高 25 cm 以上である。33 は瀬戸・美濃産の施釉陶器花瓶である。口縁部は欠損している。体部外面は鉄釉が薄く残存している。体部外面下半から底部は露胎している。底部外面には糸切り痕がみられる。34 は丹波産の焼締陶器播鉢の底部片である。底部径 16 cm である。内

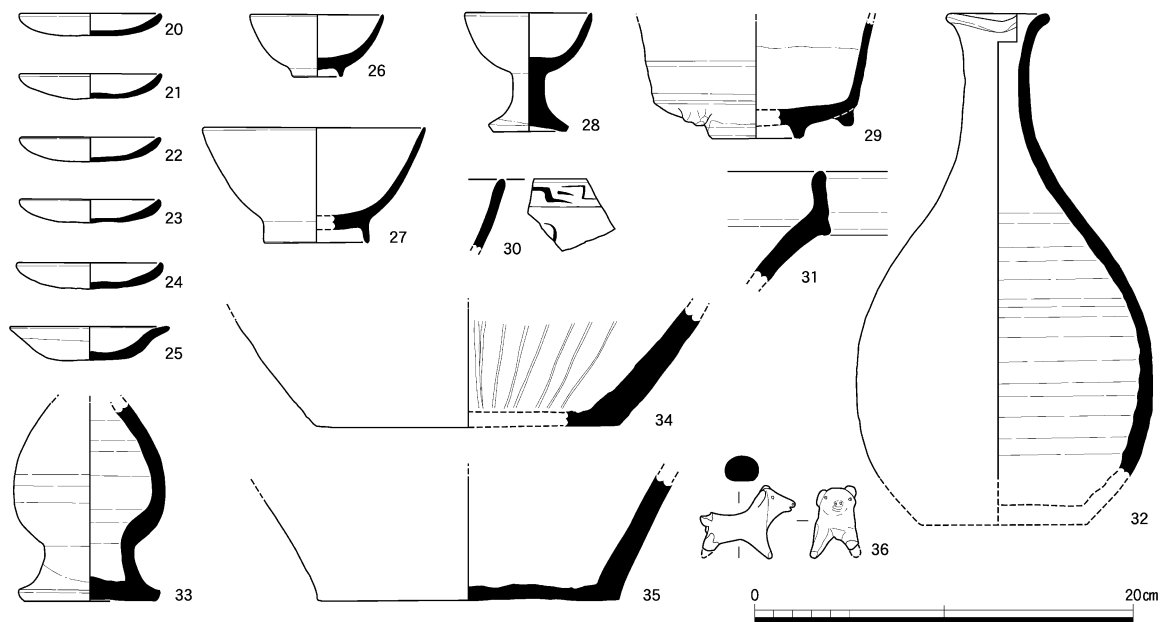


図 16 堀 2 出土遺物実測図 (1 : 4)

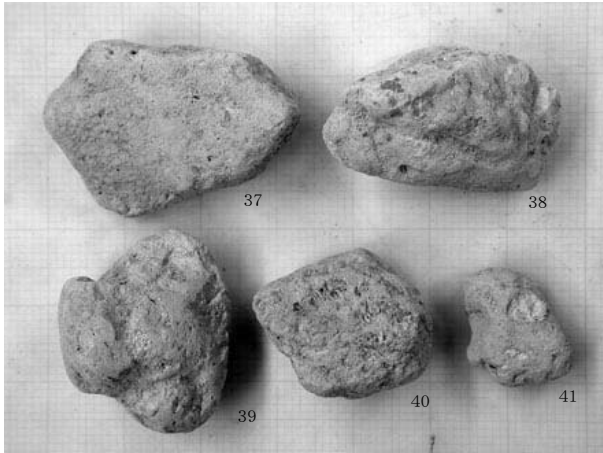


図17 土坑13出土壁土

面の播目は単線である。35は信楽産の焼締陶器甕の底部片である。底部径16cmである。調整は内外面ともにナデである。

(2) その他の遺物

石製品(図14、図版4) 溝42から滑石製の紡錘車(11)が出土している。裁頭円錐形を呈する。上下面・側面とも研磨され、平滑に仕上げている。平面形は径4cmの円形である。厚さは1.1cm、孔径は0.6cmである。

土製品(図16、図版4) 堀2から瓦質の犬形土製品(36)が出土している。脚と尾は一部欠損している。長さ5.0cm、幅2.6cm、高さ3.8cmである。

壁土(図17) 溝42上面の土坑13からは壁土(37～41)が出土している。粗土中にはスサと粗砂が入る。熱を受け硬化したものが大半である。建物の壁土ではないかとみられ、付近に壁造りの建物を想定させる。

(3) 自然遺物

堀1と堀2周辺の植生環境復元を行うための土壌をサンプリングし、分析を行った(図18、表3)。サンプリングの際、堀1は調査区南壁で最下層に近い9・10・13層から、堀2は調査区北壁で下層から順番に18・16・15・13・12・5・4層から土壌を採取した(図10参照)。土サンプルは1・2mmの篩と0.25mmのシルクスクリーンで選別し実体顕微鏡で同定した。

木本では、堀1は未検出。堀2はヒサカキ・キイチゴ属・タラノキを検出した。ヒサカキは13層、キイチゴ属は16層から多く検出した。

草本では、堀1は13層から炭化したコムギ1点を検出した以外、皆無であった。堀2は16層から水湿性のカヤツリグサ科・ホタルイ属、13・18層からは水湿性のコナギ・イボクサを検出した。12層では種類が減るが、道端・畑に生育するザクロソウと日陰に生育するドクダミが多く検出された。4・5層になるとドクダミしか検出できなかった。

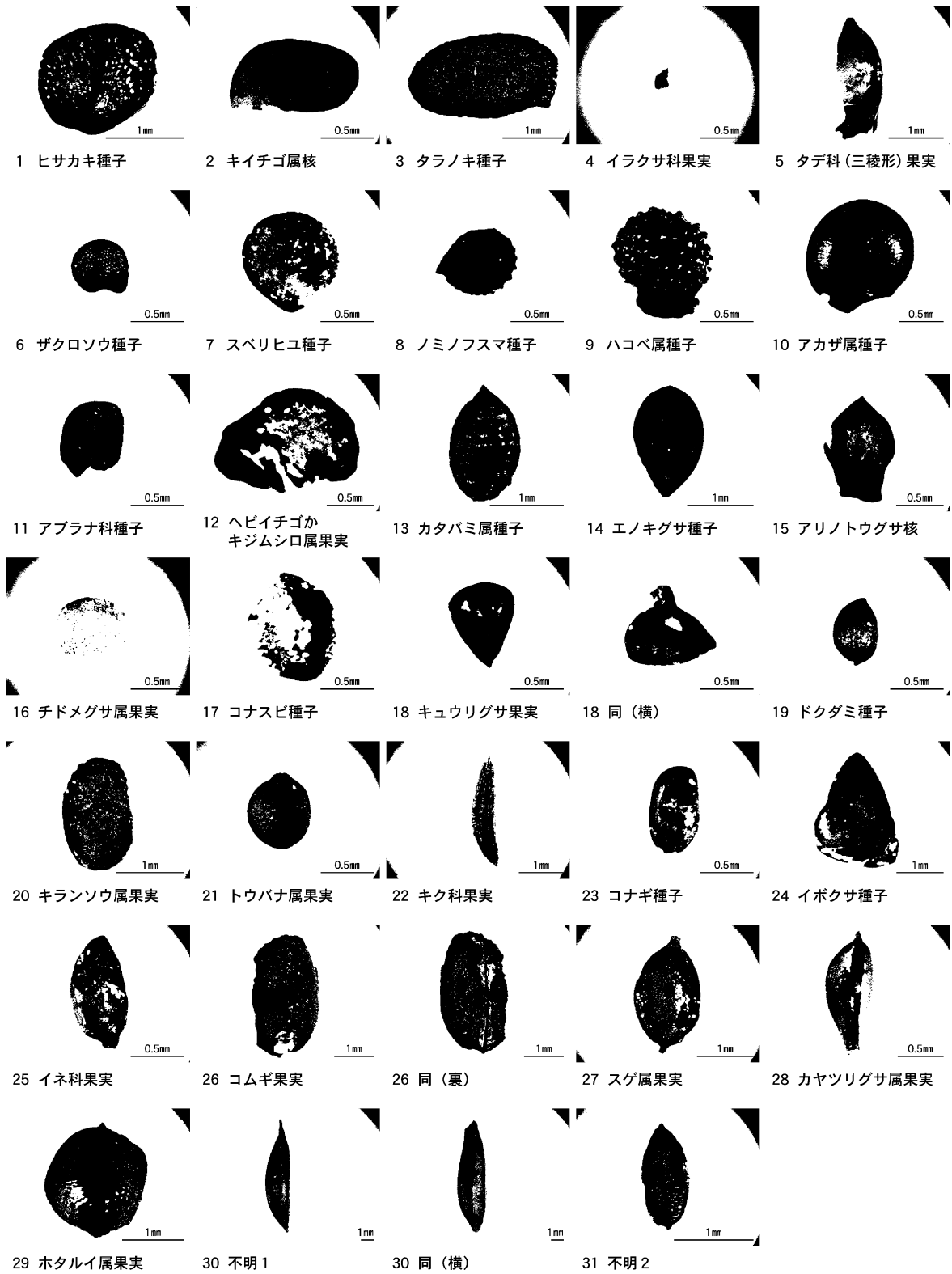


図 18 堀1・2 出土自然遺物

表3 堀1・2出土自然遺物一覧表

木本		サンプリング量 (cm ³)		約480	約630	約430	約490	約560	約200	約460	生育場所
番号	和名	部位	科名	堀1-13	堀 2-16	堀2-18	堀2-13	堀2-12	堀2- 5	堀2- 4	
1	ヒサカキ	種子	ツバキ			3	10	1			庭木・山地
2	キイチゴ属	核	バラ		37	4	5	1			山野・道端
3	タラノキ	種子	ウコギ				2				山野
草本											
番号	和名	部位	科名	堀1-13	堀 2-16	堀2-18	堀2-13	堀2-12	堀2- 5	堀2- 4	生育場所
4	イラクサ科	果実	イラクサ					3			山野・湿地
5	タデ科 (三稜形)	果実	タデ			1					山野・水田・畑
6	ザクロソウ	種子	ザクロソウ				2	154			道端・畑
7	スベリヒユ	種子	スベリヒユ					3			畑・道端
8	ノミノフスマ	種子	ナデシコ		2						水田・畑・野原
9	ハコベ属	種子	ナデシコ		16	11					道端・畑
10	アカザ属	種子	アカザ		1	1					道端・荒地
11	アブラナ科	種子	アブラナ		3	3					水田・水辺・道端
12	ヘビイチゴかキジムシロ属	果実	バラ		3						野原・河原
13	カタバミ属	種子	カタバミ		6	6	2	5			道端・畑
14	エノキグサ	種子	トウダイグサ		1	1	1				道端・畑
15	アリノトウグサ	核	アリノトウグサ		3	1					山野
16	チドメグサ	果実	セリ				2				道端・庭・野原
17	コナスビ	種子	サクラソウ		1						道端
18	キュウリグサ	果実	ムラサキ			1					野原・道端
19	ドクダミ	種子	ドクダミ			5	16	35	13	5	日陰いたるところ
20	キランソウ属	果実	シソ			1					野原・道端・土手
21	トウバナ属	果実	シソ		5						山野
22	キク科	果実	キク		2						野原・湿地
23	コナギ	種子	ミズアオイ			1	2				水田
24	イボクサ	種子	ツユクサ				1				水田・沼
25	イネ科	果実	イネ			2					道端・野原
26	コムギ	果実	イネ	1 (炭化)							栽培
27	スゲ属	果実	カヤツリグサ				1				水辺・湿地・道端
28	カヤツリグサ科 (三稜形)	果実	カヤツリグサ		1			8			湿地・山野
29	ホタルイ属	果実	カヤツリグサ		2						水田・溝・湿地
30	不明1				6						
31	不明2				10	1	1	1			
その他											
番号	和名	部位	科名	堀1-13	堀 2-16	堀2-18	堀2-13	堀2-12	堀2- 5	堀2- 4	生育場所
32	昆虫	頭部・上翅 ・胸腹・脚			27	2	17	3	2	1	

5. ま と め

今回の調査では、古墳時代初頭から江戸時代の遺構が良好に残存することが判明した。特に古墳時代の遺構については、集落の存在と当地の開発時期に関連する新たな知見を得た。また、中世から近世にかけての堀や井戸などの遺構については、革嶋氏が鎌倉時代から代々蓄積してきた『革嶋家文書』（京都府立総合資料館所蔵）の江戸時代中期の絵図「讓渡革嶋家屋敷¹⁾」（図 22）、「革嶋家屋敷²⁾絵図」（図 23）と対比しながら、以下に調査地の様相を要約する。

古墳時代（図 19） 古墳時代の遺構については、調査区北端で検出した古墳時代初頭の東西溝 42 が挙げられる。断面形状や規模から人工的に開削された溝とみられ、周辺の開発が溝の造られた時期まで遡ると考えることができよう。当溝以南では詳細分布調査も含め竪穴住居や柱列などを検出していることから、この溝が集落の北限を示す可能性が高い。さらに詳細分布調査では、調査区の南で古墳時代中期の遺物を含む竪穴住居も確認されていることから、集落の存続時期や範囲が今後の課題となる。調査地西側の丘陵上には 4 世紀中葉と推定される一本松塚古墳、百々池古墳、5 世紀中頃の天皇の杜古墳などの大規模な古墳が点在している。また、集落跡については、調査地の南東に弥生時

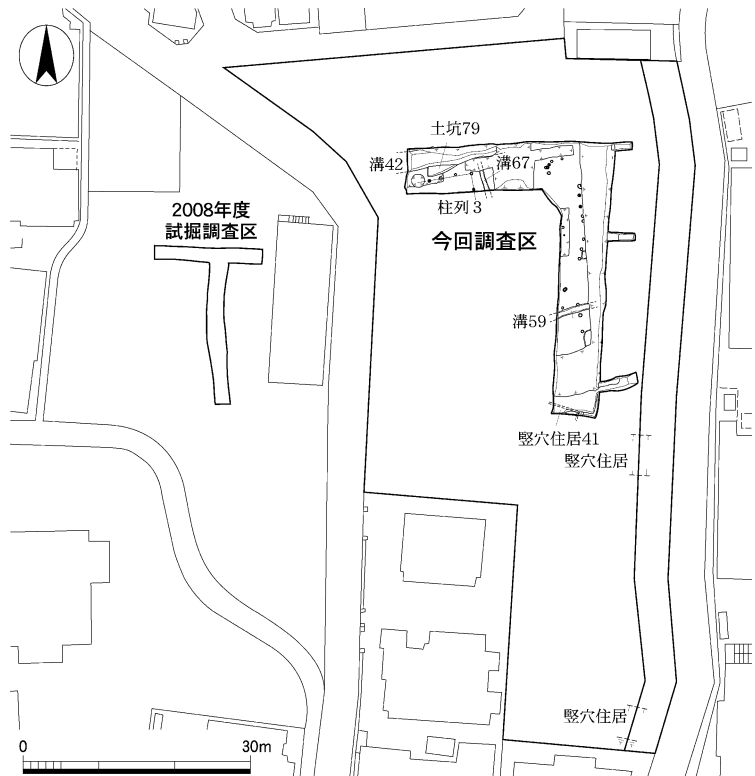


図 19 古墳時代の遺構概略図（1：1,000）

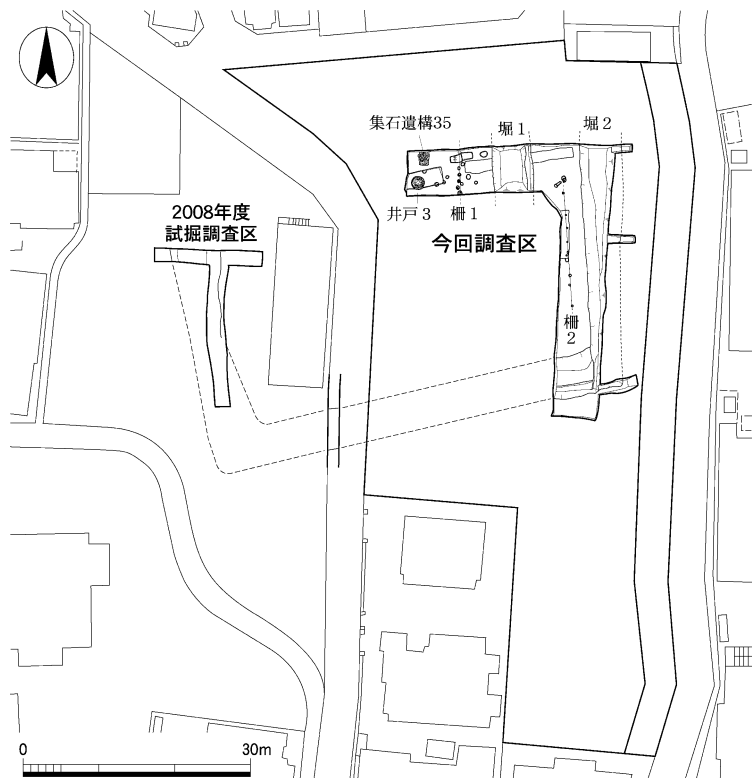


図 20 室町時代の遺構概略図（1：1,000）

代から古墳時代の下津林遺跡、上久世遺跡、中久世遺跡などがみられる。古墳や集落跡の遺跡分布から調査地を含む桂川右岸域は、桂川や自然河川に沿って南から北へ順次開発が進んだとされており、今回の集落遺跡の発見は、この問題に新たな資料を提供することとなった。

古墳時代初頭の土器類については、竪穴住居や区画溝から庄内式併行期以降の甕や壺、高杯が出土しており、今後、当遺跡の南東に立地する遺跡群から出土の土器類と比較・検討を行い、集落の動向などを考える必要があるだろう。

室町時代から江戸時代（図 20）調査では、南北方向の堀 1 と南北方向から南端で西に屈曲する堀 2 の 2 条の堀を検出した。江戸時代中期（元禄年間）の絵図には、館を囲む土塁と堀が描かれている（図 22・23）。堀 2 は絵図に描かれた堀の東側と南東角にあたると思われる。革嶋氏は清和源氏・佐竹氏の子孫で、各種の代官を請け負い、鎌倉時代には近衛家の代官（下司職）として革嶋南荘の荘園管理を請け負い、室町時代には土豪として勢力を駆け在り地領主となる。天正 10 年（1582）、山崎合戦で明智光秀方に属し、一時所領を失うが、江戸時代に当地に戻る³⁾。絵図はその当時のものとみられ、堀 2 の堆積土からは室町時代から江戸時代の土器類が出土しており、そのことを裏付けている。2008 年の試掘調査⁴⁾では南半部西側の堀の一部を確認しており、今回の調査と合わせると、館南半部の東西幅は約 47m であることが明らかになった。堀の内側に描かれた土塁については、その痕跡は確認できなかった。竹藪の土入れ・採りなどにより削平されたと考えられ、土塁の有無を含め、構築などについては課題として残った。堀 1 の西では井戸、集石遺構、柵などの館に関連する施設を検出した。検出した遺構は、絵図では示されていない館内の南半部の空白地にあたる。遺構の時期が室町時代後期であることから、絵図作成以前の施設と考えられる。また、堀 1 も絵図には描かれていないことから、西側の施設と同時期と考えられる。

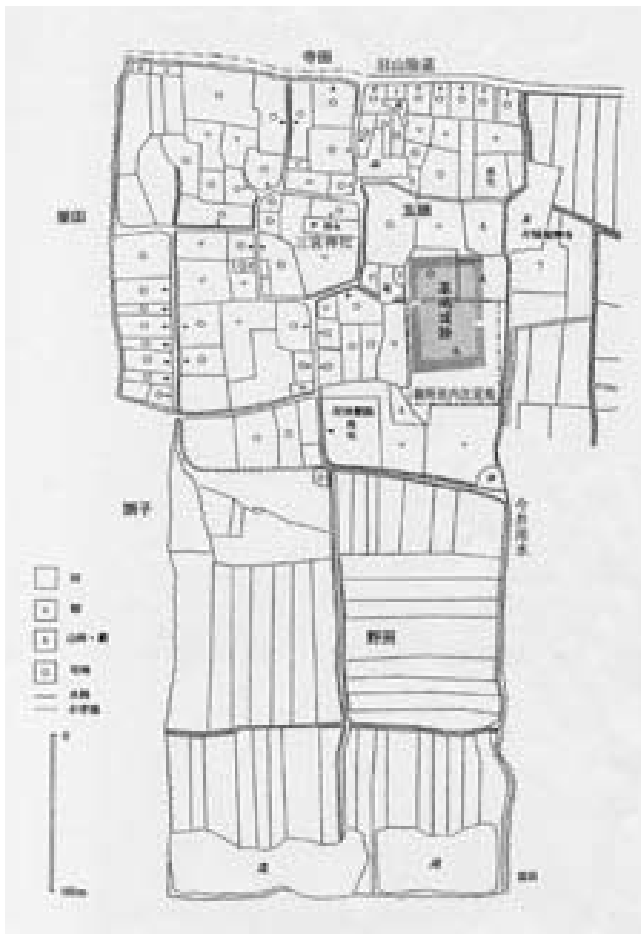


図 21 革嶋館跡周辺地籍図

と考えられ、土塁の有無を含め、構築などについては課題として残った。堀 1 の西では井戸、集石遺構、柵などの館に関連する施設を検出した。検出した遺構は、絵図では示されていない館内の南半部の空白地にあたる。遺構の時期が室町時代後期であることから、絵図作成以前の施設と考えられる。また、堀 1 も絵図には描かれていないことから、西側の施設と同時期と考えられる。

嘉暦元年（1326）の『革嶋南庄差図』には「御所カキ内」と明示されており、地籍図（図 21）と比較すると、その範囲がよく一致する。近世末期の革嶋氏の由緒書きでは、革嶋館は近衛氏の下屋敷という認識であった⁵⁾。荘園制が根強く残る畿内では、政所屋敷が城館へ変遷するという特性がみられる⁶⁾。今回検出した堀 2 は水堀で、防御的機能を優先しており、

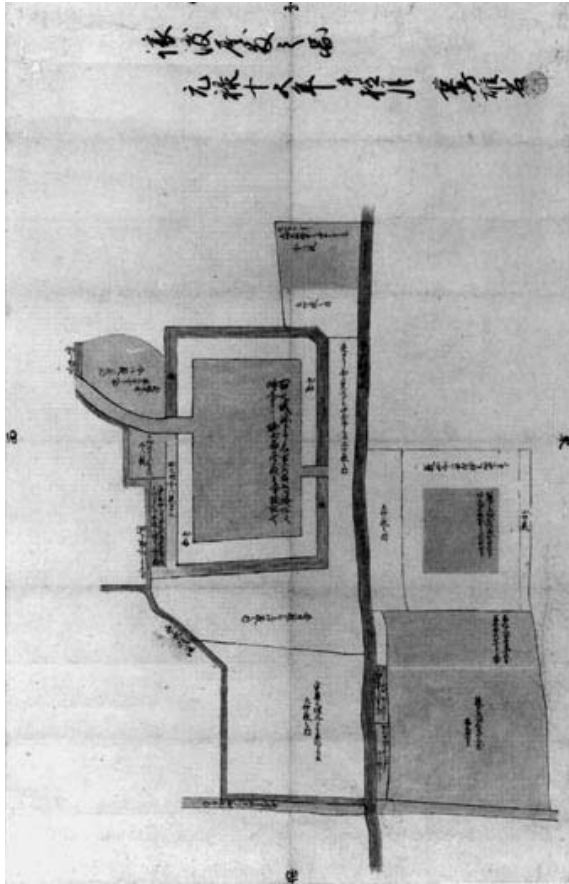


図22 「譲渡革嶋家屋敷図」『革嶋家文書』
京都府立総合資料館所蔵

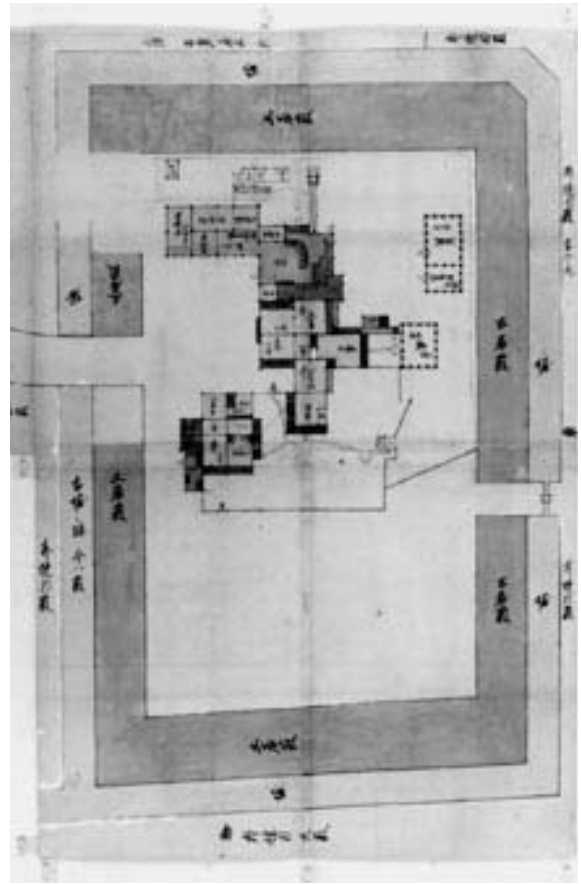


図23 「革嶋家屋敷絵図」『革嶋家文書』
京都府立総合資料館所蔵

堀1は空堀ということから、区画を重視している。土壌分析でも堀1からは水湿性の草本・木本は検出されず、炭化したコムギが検出されており、堀2の下層からは水湿性のカヤツリグサやコナギなどの草本が検出されており、発掘の状況を裏づけている。以上のことから、堀1は館の前身である政所屋敷に伴うもので、区画を重視した空堀であった可能性が考えられるが、堀2との共存関係も否定できないことから、館の変遷過程を考える上での検討課題である。今後、堀1の延長部である調査区外の北・南側での調査で明確になると考えられる。

出土遺物が比較的少なかったことは、絵図のとおり主屋、付属屋などの建物の中心施設が、館内の北側に位置していたことに起因すると考えられる。また、堀1・2から出土した室町時代後期の土師器皿や焼締陶器、輸入陶磁器などが、平安京内で出土する当時期の土器のあり様と類似しており、京近郊の荘園での商品流通の一端を反映していると考えられ、興味深い。

註

- 1) 「譲渡革嶋家屋敷図」『革嶋家文書』43号(32cm×49.5cm)

元禄十五年(1702)に革嶋家内での屋敷・藪を譲渡する際の絵図である。土居・堀に囲まれた方形区画には、「古之城跡トテ太閤秀吉公御検地之時分ヨリ堀土居屋敷之分除地也」とあり、この屋敷が戦国期においては城郭として利用されていたことがわかる。また、太閤検地では除地として登録さ

れた。なお、この絵図で、中央の南北に走る太い線は、西岡の多くの田地を潤した今井用水である。また、屋敷区画の南西の「悪水抜溝」とある水路は、千代原村用水の末流である。

2) 「革嶋家屋敷絵図」『革嶋家文書』42号(58.5 cm×89.3 cm)

作成年代は不明であるが、43号文書と同時期に作成されたと考えられる。図面種類は建物指図である。場所は川嶋村の氏神である三宮社の南東に位置している。堀と「土居藪」に囲まれた方形居館は、北半分に建物が集中している。開口部は東西にあり、西側の開口部は正門で、本屋敷の玄関が配置されており、そこから道が村落とつながっている。建物は本屋敷、離れ屋敷、二階蔵、米蔵、隠居之物置蔵からなっている。本屋敷内部には台所、土間、湯殿、薪部屋など配置されており、元禄十五年(1702)頃の惣領革嶋家の住居の様子が窺われるとともに、戦国期の規模についても類推できる。

3) 仁木 宏『戦国時代、村と町のかたち』山川出版社 2004年

4) 『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』京都市文化市民局 2009年

5) 福島克彦「乙訓・西岡の城館と集落」『京都乙訓・西岡の戦国時代と物集女城』文理閣 2005年

6) 福島克彦「戦国期畿内の城館と集落」『新視点中世城郭研究論集』新人物往来社 2003年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	かわしまやかたあと							
書名	革嶋館跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-6							
編著者名	加納敬二・布川豊治・竜子正彦							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年10月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわしまやかたあと 革嶋館跡	きょうとにしきょうく 京都市西京区 かわしまたまがしらちょうちきき 川島玉頭町地先	26100	997	34度 58分 29秒	135度 42分 08秒	2009年8月 31日～2009 年9月29日	365m ²	宅地造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
革嶋館跡	平城跡	古墳時代	竪穴住居、柱列、 溝、土坑	土師器、須恵器、石製 品				
		室町時代	堀、溝、土坑、井 戸、柵	土師器、須恵器、瓦器、 施釉陶器、焼締陶器、 輸入陶磁器、瓦類、土 製品、壁土				
		江戸時代	堀、溝	土師器、施釉陶器、焼 締陶器、磁器、瓦類				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-6

革 嶋 館 跡

発行日 2009年10月30日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961